

アニメーション的な誤配としての多重見当識

——非対人性愛的な「二次元」へのセクシュアリティに関する理論的考察

松浦優

(九州大学・院)

本稿の目的は、対人性愛に還元されない「二次元」へのセクシュアリティが存在可能であることと、そのようなセクシュアリティがいかに社会で不可視化されるのかということと、ともに説明できる理論を提示することである。まず、先行研究で対人性愛が自明化されてきたことを批判したうえで、「二次元」への欲望を「人工環境と化した知識集積にもとづいて制作された人工物」への欲望として定式化する。次に、性別二元論と対人性愛中心主義を批判する理論を東浩紀による否定神学批判から引き出したうえで、現実社会における規則や規範の再生産を空転させる「アニメーション的な誤配による攪乱」を理論化する。最後に、こうした非対人性愛的なセクシュアリティが、抑圧や禁止とは異なる「ただ意味を失う」という仕方で巧妙に抹消されることを、バトラーとウィニコットに依拠しつつ論じる。以上を踏まえて、対人性愛を自明視しないための今後の研究方針を提示する。

キーワード

対人性愛中心主義、性別二元論、〈字義どおり化〉という幻想、ポルノグラフィ、パフォーマンス／アニメーション

I. 背景と目的

マンガやアニメなど、いわゆる「二次元」の性的表現を愛好する営みについては、これまで「オタク」や「マンガ読者」や「ファン」として研究されてきた。これに対して近年では、「二次元の性的表現を愛好しつつ、生身の人間への性的惹かれを経験しない」人々や「二次元」キャラクターのみに

性的に惹かれる人々について、セクシュアリティの観点からの議論がなされている。こうした人々はアセクシュアルの人々と似た仕方で周縁化される場合があり(松浦2021a)、またアセクシュアルをめぐる近年の問題提起と同じく、セクシュアリティをめぐる従来の認識枠組みを問い直す視座を

含んでいる (Miles 2020)。

たとえばこうした人々の観点からは、「生身の他者に対して性的・恋愛的に惹かれることが規範的なセクシュアリティとされること」を「対人性愛中心主義」と呼んで批判する議論がなされている¹ (松浦 2021b, 2021c)。一般的には性的表現は対人性愛文化のなかから生み出され、そして対人性愛文化を再生産するものと想定されがちだろう。にもかかわらず、それを批判的に問い直す議論が、まさに性的表現を愛好する立場にもとづきながら展開されているのである²。

本稿の目的は、このような対人性愛に還元されない「二次元」へのセクシュアリティが存在可能であることと、そのようなセクシュアリティがいかに社会で不可視化されるのかということ、この2つをともに説明できる理論を提示することである。そしてこの作業を通じて、従来の議論に含まれる対人性愛中心主義的な側面を問い直すことを試みる。

II. 先行研究

すでに述べたように、本稿はオタク論やファン、受容者研究ではなく、セクシュアリティの問題を扱う。しかし従来のオタク論やファン、受容者研究のなかにも、対人性愛に還元しない形で「二次元」へのセクシュアリティを捉える議論の萌芽を見出すことができる。

1. 対人性愛を相対化する議論の系譜

対人性愛を相対化する観点は、「二次元」文化の初期から見て取れる。たとえば1980年代にも、「いわゆる“正常愛”としての恋愛とセックス」の相対化を見出す語りが残っており (富沢 1985: 175)、「恋愛をしなくてはならない」「消費は恋愛のために行わなくてはならない」という当時の規範に抵抗するものと言える (吉本 2009: 198)。

こうした議論を精神分析的なセクシュアリティの理論として提示したのが斎藤環である。フィクションを受容する際に、作品世界のみに入居するのではなく、キャラクター、脚本、マーケティングなど、複数のレベルを切り替えながらフィクションを楽しむこと、これを斎藤は「おたく」の特徴とみなし、「多重見当識」(multiple orientations)と概念化した (斎藤 2000: 44-6)。この延長として、斎藤は「想像的な倒錯傾向と日常における『健常』なセクシュアリティとの乖離」という「おたくのセクシュアリティ」の特徴を、「欲望の見当識」の切り替えとして理論化した (斎藤 2000: 53)。このようなセクシュアリティとしての多重見当識は、「クィア理論家たちが魅力を見出すであろう仕方で、性的欲望を社会的アイデンティティや自然化された身体から切り離す」ものだと指摘されている (Vincent 2011: xx)。ここには対人性愛を相対化しうる視座が含まれており、性的／恋愛的創作物を愛好するアセクシュアルの人々や、「二次元の

1 この批判は強制的性愛 (Gupta 2015) への批判と大きく重なるものである (松浦 2022b [近刊])。

2 「二次元」の性的表現をめぐる法的・倫理的議論は、「表現の自由」の問題とみなされがちだが、むしろ非対人性愛的なセクシュアリティをめぐる権利や承認の問題として理解する必要がある (Miles 2020; 松浦 2021a)。

性的表現を愛好しつつ、現実の他者への性的惹かれを経験しない」人々を把握する理論として読み替えられるものである（松浦 2021b: 76）。

これに対して、この乖離をマンガ表現論として提示したのが大塚英志の「記号的身体」論である（大塚 1994）。大塚の議論は、記号的身体しか描けないことをマンガ表現の限界として批判するものであり、「記号的表現に『性』を演じさせ、特に直接的な性的イメージをその絵から喚起せしめることには本質的に矛盾がある」（大塚 1994: 25）という対人性愛中心主義的な主張もなされている。それでも、記号的身体という概念によって対人性愛とのズレを言語化したことは重要である。

斎藤や大塚の議論を踏まえつつ、東浩紀（2001）は「データベース消費」という概念を提示したが、そこで言うデータベースには、ある種の創作を受容する人々の間で広く共有された、そのジャンルに関する知識集積が含まれる。いわば架空世界の「お約束」に関する知識の集積なのだが、ポストモダン社会ではこのデータベースがある種の創作の世界において「現実世界」の代替物として機能するほどにまで発展している（稲葉 2006: 75）。これによって、現実世界を写生する自然主義的リアリズムの小説とは異なる、「アニメやまんがのようなもう一つの『仮想現実』」（大塚 2003）を描写する「まんが・アニメ的リアリズム」のキャ

ラクター小説が可能となる。かくして、現在では「文学的想像力の基盤として、自然主義的リアリズムとまんが・アニメ的リアリズムという、二つの異なったメタジャンルの環境」が成立しているのである（東 2007: 66 太字原文）。

つまり大塚や稲葉や東浩紀が提示したのは、架空世界に関する知識集積（あるいはデータベース）が現実世界から乖離・自律した「人工環境」として成立しており、それが社会的にも一定程度共有されている、という社会状況である。これこそが「対人性愛を前提としない慣習を備えたジャンルとして『二次元』が成立した」ことの歴史的・社会的背景である（松浦 2021b: 77）。

大塚や東浩紀などの影響を受けつつ、マンガ表現論としてセクシュアリティの議論を展開したのが伊藤剛である。伊藤は大塚の「記号的身体」論を批判的に引き継ぎつつ、「身体の表象」ではなく「身体を想像させるもの」としての「キャラ」を精緻に理論化した（伊藤 2014: 116）。つまり伊藤は、人間とは異なる存在物としてキャラを位置づけたうえで、人間を欲望の対象とする営みとは異なるものとして、キャラを欲望の対象とする営みを論じているのである。このように伊藤の理論は「二次元」へのセクシュアリティを理解するうえで非常に重要だが、その詳細については後述する。

以上の議論と並行して、フェミニズムやクィアの観点からの議論も蓄積している³。

3 性的マンガ表現をめぐるこの種の議論では、読者はどのキャラクターに同一化するか（あるいはいずれにも同一化せずに俯瞰するか）という問いが検討されることがある（e.g. 堀 2009; 守 2010）。これ自体は意義のある問いだが、「描かれている存在がそもそも人間ではない」という点を重視する本稿の問題関心とは、まさに次元の異なる問いである。

たとえば藤本由香里は、少女マンガにおける「少年愛」について、女性が「自分と性愛との間に安全な距離を作ること、ひいては、自分にも〈性愛を遊ぶ〉こと」（藤本 1992: 283）を可能にするものだと、早い時期からフェミニズム的に評価している。ここでは「少年愛」マンガが、性愛を描いているにもかかわらず逆説的に性愛から「安全な距離を作る」ものとして、つまり性愛を相対化しながら性愛を楽しむという意味で、強制的性愛や対人性愛中心主義への批判となりうる見方が示唆されている。

こうしたフェミニズム的立場から、「異性愛者／同性愛者／両性愛者／無性愛者……」といった現実世界におけるアイデンティティと、ポルノグラフィを介したセクシュアリティは多様な関係をもっている」（守 2010: 87 傍点引用者）ことに注意しつつ、女性向けポルノコミック読者について研究したのが守如子である。守によれば、とりわけ「受け」に共感しながら読む読者（女性に多いとされる）にとって、「受けの立場に立つ女性がいやな思いをしているのではないかという不安」が問題となる（守 2010: 208）。本稿にとって注目すべきは、こうした不安を解消する「安全化」の装置として、「モノログ」や「物語構造」に加えて「フィクションであるとする意味付け」（守 2010: 122）が挙げられている点である。この指摘は「対人性愛を前提としない」セクシュアリティが成立可能であることを示唆するものと言える。また守は、読者にとっての「安全化」に加えて「レイプ

神話」の再生産を防ぐためにも、「ポルノグラフィというマスターベーション・ファンタジーをフィクションとして正しく理解する能力を身につける」という「ポルノリテラシー」の重要さを強調する（守 2010: 212）。

これとはやや異なる観点から、クィア理論的に BL（ボーイズラブ）愛好家女性について論じているのが溝口彰子（2015）である。溝口の議論で特筆すべきは、BL 愛好家女性たちの実践やコミュニケーションそのものをクィアリーディングし、BL 愛好家女性同士の「妄想の交換・交歓」を「『ヴァーチャル・レズビアン』セックス」と解釈している点である。溝口の分析は、異性愛主義的な解釈図式を批判するとともに、身体的な性交を相対化する要素をも含むものと言える。

そして従来の「オタク」論とルーマンの理論をもとに、「やおい」における「恋愛のコード」がいかなるものかを論じたのが東園子である。東園子が注意を促すのは、「宝塚とやおいが恋愛を描いているからといって、その愛好者が両者を通して恋愛に対する欲求を満たそうとしているとは限らない」という点である（東 2015: 18）。「恋愛のコード」は社会的に（とりわけ女性の間で）広く共有された「お約束」の知識集積であり、だからこそ「やおいにおける恋愛という要素は、女同士のコミュニケーションを効率化するツールとして機能する」（東 2015: 228）。そして「やおい」の解釈パターン⁴を習得していれば、「内面にとくに〈男

4 たとえば藤本は「受け／攻め」を「やおい」の「作法」として説明しているが（藤本 2007: 44）、この

どうしの愛〉でなければならないという切実な動機がなくても」「やおい」の解釈共同体に参入できる(藤本 2007: 44)。それゆえ「恋愛のコードを用いたやおいのコミュニケーション」は「恋愛に対する関心の有無等にかかわらず、恋愛のコードを習得してさえいれば参入可能」なのである(東 2015: 228)。これは「恋愛に関心を持つことと、恋愛のコードを習得することとの間の乖離」を指し示す議論であり、斎藤や東浩紀の理論をアロマンティックに読み替えたものとして解釈できる(松浦 2021b: 77)。

このように従来の研究では、「二次元」表現が性や恋愛を描きつつ、同時にそれらを相対化しうるものが、さまざまな仕方で示唆されている。もちろん、ジャンル特有の「お約束」が現実世界の規則から乖離したものとして成立している、ということ自体は様々なフィクションに当てはまる。しかし「二次元」表現においては、性や恋愛そのものが、表現形式や受容形式および欲望の対象という複数のレベルにおいて、現実世界の規則から自律可能になっているのである。

2. 従来議論の問題

しかし他方で、従来研究では「二次元」表現による性愛の相対化という側面は十分に掘り下げられてこなかった。斎藤の理論では性別二元論的枠組みが前景化しており、また生身の人間へ性的に惹かれない人の存在も想定されていない(松浦

2021b)。また東浩紀は、二次元表現に対する「動物的な欲求」はセクシュアリティの問題にならないとしている(松浦 2021b)。そして「オタク」男性の男性性を分析した議論(e.g. ササキバラ 2004; 東 2007; 田中 2009)では、「二次元」へのセクシュアリティという論点はジェンダーの論点へと還元されてきた。端的に言えば、“作中での女性キャラクターと男性キャラクターの関係”と“女性キャラクターと男性受容者の関係”と“現実での女性と男性の関係”とを重ね合わせる形式の議論⁵では、対人性愛が予め自明化されてしまい、「二次元」へのセクシュアリティという問題がジェンダーの論点に還元されるかのように抹消されてしまうのである。

上記以外の先行研究にも課題はある。まずポルノリテラシーの重要性を訴える守の議論は、個々人のリテラシーを強調する一方で、対人性愛が社会で自明視されているという構造的問題を捉え損ねている。後にあらためて触れるが、対人性愛中心主義は、「レイプ神話」の再生産のみならず、女性の性的モノ化の再生産を可能ならしめるものである。このような構造的問題を把握できる理論が必要である。また溝口の「ヴァーチャル・レズビアン」論では、BLを愛好する営みの議論が性愛の語彙に回収されており、フィクションの受容は他者との性行為とは異なる営みだということが持ちうる意味や意義を言語化できなくなっている。言い換えれば、BL愛好家たちの間に

「作法」もまた本稿で言う架空世界の「お約束」の1つである。

5 このことは「男性」と「女性」を入れ替えた場合にも当てはまる。また他の属性でも同種の議論ができる場合があるだろう。

創作物が介在していること、それによってBL愛好家たちの間に距離が存在すること、こうした介在や距離によって開かれるアセクシュアルな余地の可能性が、予め抹消されているのである。

これに対して、東園子の議論には対人性愛を相対化する視座があるものの、そのことは明確には提示されていない。この視座を展開しながら東園子や斎藤らの議論を対人性愛中心主義批判の理論として読み替えたのが松浦（2021b）だが、しかし松浦は「二次元」へのセクシュアリティの実態を捉えられる理論を提示できていない。たとえば、「二次元の性的表現を愛好しつつ、現実の他者への性的惹かれを経験しない」人々のなかにもアイデンティティの多様性があることや⁶、「二次元」と「三次元」の両方に惹かれつつも双方を異なる規則によって受容している人もいること（斎藤 2000, 2003）などを、理論的に説明できていないのである。

Ⅲ. アニメーション的制作物への欲望

以上の課題を乗り越えるうえで示唆に富むのが、テリ・シルヴィオ（Teri Silvio）による〈アニメーション〉の理論である。シルヴィオは、ゴッフマンやバトラー的なパフォーマンス概念では捉えられないことがらがあると指摘し、それを補うものとしてアニメーションの理論を提示している。シルヴィオの言うアニメーションとは、「創造、知覚、相互作用の行為を通じて、人間

として認識される性質——生、力、エイジェンシー、意志、人格など——を自己の外側、感覚的環境に投影すること」である（Silvio 2010: 427）。つまりパフォーマンスがアイデンティティや取り込みといった自己構築の理論であるのに対して、アニメーションは外的環境への投影という他者構築の理論なのである。それゆえシルヴィオは「バトラーのラカン読解がパフォーマンスを自己への環境の取り入れとして位置づけているとすれば、アニメーションの心的理論は環境への自己の投影に焦点を当てるものである」として、心的プロセスとしてのアニメーションを捉える理論としてウィニコットの移行対象論を挙げている（Silvio 2010: 426）。

アニメーションの理論は、生気を与えられた（animated）「二次元」キャラクターとそのファンとの関係を考える理論として応用できる。パフォーマンス・パラダイムでのメディア・ファン研究では、理想化された他者を自己のうちに取り入れるという、アイデンティティや同一化の観点から議論されていた。これに対して、「生気を与えられたキャラクターは、取り入れられたロールモデルというよりも心理的に投影された欲望の対象である」（Silvio 2010: 429）。このことが表れている事例として、シルヴィオは「萌え要素」（東 2001）や「おたくのセクシュアリティ」（斎藤 2003）に言及している。またシルヴィオはこの文脈で、男性キャラクター同士の関係性を「萌点（萌え

6 たとえば、「二次元性愛」や「フィクトセクシュアル」という言葉で強い性的アイデンティティを表明する人もいれば、ただ現実の人間へ性的に惹かれないだけの「オタク」という人もおり、また「アセクシュアルかつ腐女子」と自認する人もいる（松浦 2021a）。

ポイント)」として語る台湾のBLファンについても、自身の調査にもとづいて取り上げている。このように、シルヴィオのアニメーション理論は、先に挙げた日本の「オタク」論やファン研究とも親和的である。

しかしこれに加えて、「二次元」表現に関して重要なことは、投影によって生気を与えられたキャラクターは、それでもなお人間ではなく、ある種の人工物であるという点である⁷。アニメーションとしての「二次元」表現の制作と受容のプロセスでは、単に既存のモノや外的環境に何かを投影するだけでなく、その投影を通じて新たなカテゴリーに属するモノが生み出される。このような人工物としてのキャラクターという側面について徹底的にこだわったのが、伊藤の「キャラ／キャラクター」論なのである。伊藤はマンガの構成要素として「キャラ」と「キャラクター」の区別を提示する。

あらためて「キャラ」を定義するとすれば、次のようになる。

多くの場合、比較的簡単な線画を基本とした図像で描かれ、固有名で名指されることによって（あるいは、それを期待させることによって）、「人格・のようなもの」としての存在感を感じさせるもの

一方、「キャラクター」とは、「キャラ」の存在感を基盤として、「人格」を

持った「身体」の表象として読むことができ、テキストの背後にその「人生」や「生活」を想像させるもの

と定義できる。（伊藤 2014: 126 傍点原文）

ここでは「人格」「身体」「人生」「生活」といった人間を想起させる言葉がすべてカッコでくくられており、あくまで人間の身体として「読むことができるもの」ということが強調されている⁸。つまりここでは、キャラ／キャラクターはモノである——特定の制作者によって作られた人工物である——ということが重要となっているのである⁹。もちろん言うまでもなく、人間ではない単なるモノなので無価値だ、ということにはならない。むしろ逆である。現に多くの人々がキャラ／キャラクターという人工物を制作し、そしてそれに強く惹きつけられている。そのときキャラ／キャラクターは、統合された「人格・のようなもの」を備える固有の存在として、確かに魂を宿しているのである。

これを踏まえて、伊藤は読み方の区別として「『キャラ』のレベルの読み」と「『キャラクター』としての読み」を提示する。前者は「キャラ」を人間の身体の表象としてではなくそれ自体として楽しむ読み方であり、後者は「キャラクター」の背後に「人間」を見出す読み方である。ただし伊藤に

7 キャラクターを人工物とみなす議論として、稲葉（2006）やThomasson（1999）が挙げられる。

8 「キャラ」は必ずしも図像で描かれる必要はなく、まんが・アニメ的リアリズムに基づいて作られた小説などにも「キャラ」は成立する。

9 あるキャラ／キャラクターAについて、「（ある作品世界内において）Aは人間である」という虚構内の言明が真である場合にも、「Aは人間ではなく人工物である」という虚構外的言明は真である。

よる読み方の区別は、キャラクターもまた文字どおりには人間とは異なる存在物であるということを反映しておらず、それゆえマンガの構成要素としてのキャラ／キャラクターの区別とは必ずしも一致しない¹⁰。むしろ「人工物としての読み」と「人間としての読み」と言い換えたほうが、論点は明確になるだろう。そしてこの読みの区別は性的表現にも適用できる。つまり「キャラ」のレベルの読みとは、まさしく非対人性愛的な読みなのである。

そして「『キャラ』のレベルの読み」を「人工物としての読み」へと捉え直すことによって、議論の射程をキャラ／キャラクターだけでなく、世界観やシチュエーション、そしてキャラクター間の関係性などにも拡張できる¹¹。これらの要素はいずれも人工環境と化した知識集積にもとづいて制作された人工物である。対人性愛に還元できない「二次元」への欲望とは、このような対象をめぐる欲望だと言える。

IV. アニメーション的な誤配による攪乱

次に必要なのは、対人性愛に還元できない「二次元」へのセクシュアリティ（以下「非対人性愛的な多重見当識」）を、従来のセクシュアリティ／ジェンダーをめぐる理論と関連づけることである。そのために、まずはジュディス・バトラー (Judith

Butler) による精神分析批判を検討する。

バトラーの見方では、精神分析（とくにラカンやジジエック）の理論は、二元論的な性的差異を他の差異よりも根源的な差異とみなし、性的差異を象徴化不可能なもの——現実的なもの——と位置づけるものである。このような枠組みにおいて、非異性愛的なセクシュアリティは「思考不可能」なもの、つまり現実界に追いやられるものとして位置づけられてしまい、象徴界の外部へと予め排除される。

これに対してバトラーが強調するのは、象徴界が不可避免的に社会的なものだということである。そして象徴界の外部とされる現実界もまた、社会的・文化的な領域のまったき外部なのではなく、あくまで社会的・文化的領域の内部にありながら「思考不可能」とみなされてしまっているものなのである (Butler 1990=1999: 145)。バトラーはこのように予めの排除を社会的な現象として位置づけなおし、そのうえで予めの排除に抵抗する理論としてパフォーマンスティビティ論を練り上げる。

しかしパフォーマンスティビティの理論はあくまでジェンダーおよびアイデンティティについての理論であるため、アニメーションに関わるセクシュアリティを把握する理論としてそのまま適用することはできない。それゆえ本稿ではバトラーに代わっ

10 本稿では人工物／人間という分類を採用するため、伊藤のキャラ／キャラクターの区別は用いず、伊藤の理論に言及する箇所以外では基本的に「キャラクター」表記を用いる。

11 たとえば、「恋愛のコード」をもとに制作された創作物であっても、その愛好者が創作物を通して「恋愛に対する欲求を満たそうとしているとは限らない」（東 2015: 18）という東園子の指摘は、二次元表現による誤配がシチュエーションや関係性の次元でも生じることを示唆している。

て、東浩紀のデリダ論『存在論的、郵便的』を参照する¹²。同書においてジェンダーやセクシュアリティはほとんど言及されないが、しかしバトラーと同じく東浩紀もまた、ラカンの現実界概念に対してデリダ的な批判をしている。すなわち、「システムの全体性の欠如を表象する」ものとして「超越論的シニフィアン」（ファルスや対象 a）を指定する理論は、その欠如を単数的なものとするかぎり、「超越論的シニフィアン」が「システムの全体性を否定的に表象してしまう」（東 1998: 116）。このような理論を東浩紀は「否定神学システム」と呼び、ラカンの理論もまた否定神学的なものであると批判しているのである。

そして同書で東浩紀は、デリダ的な否定神学批判がフーコーの『性の歴史』第1巻における権力論と親和的であると示唆している（東 1998: 259）。フーコーの権力論はバトラーにも強く引き継がれているため、フーコー＝バトラー的な仕方で東浩紀を読むことは可能だと考えられる。これを念頭に置きつつ、本稿ではバトラー的な仕方で東浩紀の理論を読み替えることを試みる。すなわち東浩紀の理論から、バトラーとは異なる仕方で現実界を——そして二元論的な性的差異の特権性や、非規範的セクシュアリティの抹消を——批判する論理を引き出す。

東浩紀による批判の矛先は、ラカンが現実界すなわち「不可能なもの」を単数的なものとして想定したことに向けられる。

「不可能なもの」を単数的に捉えるラカンは、それぞれの「不可能なもの」の歴史を抹消しているのである（東 1998: 98）。このようなラカン批判は、象徴界や現実界の歴史性や社会性を主張するバトラーの理論と重なるものである。

しかし東浩紀は「不可能なもの」について、バトラーとは異なる議論をする。東浩紀の立場では、「不可能なもの」すなわち非世界的存在は、複数的なものというよりも、端的にどこにもない。つまり象徴界の「外部」としての現実界は、実体として予め存在するわけではない。その代わり「非世界的な効果は存在し、それは個々の情報がつ速度のずれにより、つねに複数的に引き起こされている」（東 1998: 180 傍点原文）。ここで言う速度とは、たとえば手紙と電話では伝達速度が違う、ということを表す際に使う言葉である。このようなずれはメディア環境によってさらに顕在化される（東 1998: 179）。東浩紀の理論では、広い意味での情報の伝達経路が常に複数的であるがゆえに、速度のずれが常に生じており、それによって非世界的なものが効果として現れるのである。そしてこのずれによる伝達の失敗が「誤配」と呼ばれる。つまり、象徴界の秩序を攪乱する存在は、ア prioriに攪乱的なものとして存在しているわけではなく、誤配によって攪乱的なものとして現れるのである。

これをバトラー的に言い換えれば、次のように言える。バトラーの理論が「パ

12 バトラーと東浩紀を関連づける着想は、「ジュディス・バトラー『問題=物質となる身体』オンライン合評会」（2021年7月25日）における千葉雅也の発表から得た。

フォーマティブな反復による攪乱」へと注目するものだとすれば、東浩紀の読解からは「誤配による攪乱」という理論を引き出すことができる。バトラーは、個々人が規範を引用しながら行為をしていることに注目し、その引用に失敗することによる攪乱を論じている。それに対して東浩紀は、個々人の実践よりも、その間にある情報伝達において生じる失敗に理論的意義を見出しているのである。

このことは両者の理論的方針の違いとしても現れている。バトラーの言う「予めの排除」の要点は、ある特定の第一次的禁止の規則を想定する理論においては、必ず他のなんらかのタブーが予め前提として持ち込まれている、ということである。たとえばレヴィ＝ストロースやラカンは近親姦タブーを第一次的なタブーとみなしているが、かれらは近親姦タブーを異性の近親姦タブーだと自明視しており、この点において同性愛タブーが暗黙の裡に持ち込まれているとバトラーは批判する (Butler 1990=1999)。このような議論に対しては、バトラーが同性愛タブーを第一次的禁止とみなしていると誤読されることがあるが、しかしバトラーは「普遍的な一次的構造」を理論化しているわけではない (藤高 2018: 228)。バトラーの戦略は、「すべてを決定づけるアクセス不能の神」(Butler 1990=1999: 112) としての一次的構造を想定する理論に対して、その理論が暗に前提としている——その理論にとってさらに根

源的であるように見える——構造を突き付ける、というものである。いわばバトラーの批判は、否定神学のパロディによって否定神学の複数性（つまり単数的な否定神学の成立不能）をパフォーマンスに暴露するものなのである。これによって文化的な理解可能性の図式を書き換え、現に存在するにもかかわらず社会的にいないことにされてきた人々を存在可能にしていくこと、これがバトラーの狙いである。

これに対して、東浩紀は否定神学の再演という戦略をそもそも採らない。言い換えれば、誤配による攪乱は、なんらかの規範を引用しようとする実践ではない。そうではなく、情報や媒体が確率的にもたらす変容が、誤配なのである。この誤配の理論をシルヴィオのアニメーション概念とつなげることによって、非対人性愛的な多重見当識がいかに存在可能となっているのか、ということが説明できるようになる。

アニメーションはパフォーマンスとは異なり、外的環境のうえに他者を構築するものであった。そして伊藤が強調したように、「二次元」表現におけるアニメーションでは、キャラ／キャラクターという人間ではない人工物が作られる。さらに東浩紀や東園子が論じたように、「二次元」表現においては想像力の環境そのものが現実世界から分離・独立する。こうした背景のもとで、対人性愛の文化のなかから生じたはずの性的表現が、対人性愛とは異なる欲望のあり方を帰結させてきたのである¹³。

13 東浩紀は「アニメオタク」の作品受容について、「描かれたキャラクターを、一方でイメージ（絵）として、他方でシンボル（人間を表す記号）として二重に処理している」と説明している（東 2011: 107）。これは伊藤の言う「『キャラ』のレベルの読み」と「『キャラクター』としての読み」に相当する。そ

このとき「二次元」の性的表現は、現実社会の規則や規範を参照しながら、その規則や規範の再生産を空転させているのである¹⁴。もちろん「二次元」表現においてもパフォーマンスな仕方では規範の引用は行われるため、そこでも規範の引用に失敗することによる攪乱は起こりうるし、起こらないこともある¹⁵。しかし本稿にとって重要なのは、仮に規範の内容（つまり表現の内容）にずれが生じなくとも、規範が再生産される領域（あるいは次元）が現実世界や人間から人工環境や人工物へとずれることがある、ということである。言い換えれば、再生産の宛先のずれという誤配が起こりうるのである。このように、パフォーマンスな攪乱とは次元の異なるものとして、誤配による攪乱を理解する必要がある。

また、この誤配をアニメーション理論に結びつける意義は、アニメーションがアイデンティティや自己から切り離された人工物の構築であるという点にある。一方でこの切り離しは、対人性愛からの距離を可能にするものである。しかし他方で、「二次元」の性的表現を愛好するとき、人々は社

会的に（とりわけ言語的に）分節化され類型化された特定のセクシュアリティを^{パフォーマンス}実演しているわけではない。この意味で、誤配による攪乱は、パフォーマンスのパラダイムでは説明できず、それゆえアニメーション理論の観点から捉えるべきである。

さらに重要なのは、「二次元」キャラクターや想像力の環境は、制作者と受容者が共同的に構築するものであるため、その意味では「二次元」表現そのものが制作者と受容者の存在を表象するものでもある、という点である。この表象は、あくまで作品や「二次元」文化にコミットする人々という括りでの表象であるため、その内部における個々人の差異を表さない。「二次元」表現を愛好することが単一的な性的アイデンティティを帰結しにくいことの原因には、このことも挙げられるだろう。

そしてこのことは、「二次元」キャラクターが愛好者自身の自己表象になりうる、ということと結びついている。そこでは「異性」のキャラクターが自己表象として用いられる場合も珍しくない¹⁶。この点において、アニメーション的な誤配はパ

して東浩紀の言う誤配可能性とは、シンボル（あるいはシニフィアン）がイメージとして受容される可能性のことである（なお誤配可能性は、デリダの言うエクリチュールに相当する）。本稿で言う非対人性愛的な多重見当識とは、シンボルの指示対象としての人間ではなく、イメージ（あるいは伊藤の言うキャラ）そのものを欲望の対象とするセクシュアリティであり、それゆえまさに誤配によって生じるものと言える。

- 14 それゆえ、「二次元」という存在物をめぐる欲望や認識の問題は、「作品を解釈する際に読み手がどのような知識を参照しているか」という問題とは区別しなければならない。また社会構造は個々人の実践を通じて再生産されるため（Giddens 1984=2015）、個人レベルでの再生産の空転を無視するべきではない。
- 15 この点を分析する研究として、支配的な規範を問い直す内容の作品に注目する議論（e.g. 溝口 2015）が位置づけられる。
- 16 たとえばBL愛好家女性にとって男性キャラは『『欲望の対象』であり『他者』であるのと同時に、女性愛好家たちの欲望そのものであり、彼女たち自身である』（溝口 2015: 212）。また、いわゆる「パ美

フォーマティブなジェンダーの理論とも接続しうる¹⁷。

V. 「〈字義どおり化〉という幻想」としての対人性愛中心主義

このように、対人性愛中心主義とその攪乱は、ジェンダーをめぐる議論と密接に結びつきつつ、しかしそこには還元できないものである。両者の関係を理論的に捉えるうえで重要なのが、バトラーによる「〈字義どおり化〉という幻想」論である。

欲望と現実の混同——すなわち、快楽と欲望の原因は身体のある部分、「字義どおりの」ペニスであり、「字義どおりの」膣であるという信仰——は、メラニコリックな異性愛症状を特徴づける〈字義どおり化〉という幻想なのである。(Butler 1990=1999: 135)

バトラーによれば、異性愛主体の成立過程では、同性愛の可能性が否定されたうえで、さらにその同性愛の喪失そのものが忘却される、という二重の締め出しが作用している。このような異性愛主体においては、「解剖学」的なセックスと、「自然なアイ

デンティティ」としてのジェンダーと、「自然な欲望」としての異性愛が結びついている (Butler 1990=1999: 135)。これが〈字義どおり化〉という幻想である。

キース・ヴィンセント (Keith Vincent) が示唆し、松浦が整理したように、「おたくが欲望を虚構化すること」に対する否定的反応もまた、この〈字義どおり化〉という幻想と結びついている (Vincent 2011)。というのも、同性愛を予め排除することで異性愛主体が成立する、ということが可能であるためには、異性愛／同性愛という線引き以外の仕方ではセクシュアリティを分節化する可能性が予め抹消されていなければならない。その意味で、解剖学的性別 = ジェンダー = 異性愛という幻想は「性行為 = 異性間の性行為 = 性交の幻想」¹⁸ と表裏一体なのである (松浦 2021b)。だからこそ〈字義どおり化〉という幻想のもとで、非対人性愛的な多重見当識もまた抹消されることになるのである¹⁹。

ここにおいて、バトラーと東浩紀のラカン批判が図らずも合流する。すなわち、バトラー的な否定神学批判に倣って「異性愛主義は対人性愛中心主義によって下支えされているのではないか」²⁰ とさらに否定神

肉」もこの点と関連するが、これについては別稿 (松浦 2022a) を参照。

17 シルヴィオも言うように、パフォーマンスとアニメーションは排他的ではない (Silvio 2010)。

18 この表現はPrzybylo (2011: 454) による。

19 〈字義どおり化〉という幻想はシスジェンダー中心主義でもあるため、対人性愛中心主義は異性愛主義だけでなくトランスフォビアとも同根だと考えられる。この点については、強制的性愛と〈字義どおり化〉という幻想との関係という形で論じている (松浦 2022b [近刊])。

20 このことは、「『二次元』の女性キャラと生身の女性」あるいは「『二次元』の男性キャラと生身の男性」をそれぞれ同一類型に属する存在だと自明視することは、性的差異を根源的差異として予め前提してしまっており、結果として非対人性愛的な多重見当識の存在を抹消しているのではないかと、とも言い換えられる。

学を再演してみせたとき、そのパフォーマンス的な反復は、ここまで論じてきたアニメーション的な誤配と重なり合うのである。いわばそれは、セクシュアリティ／ジェンダーをめぐる議論の誤配と、「二次元」表現の誤配との重なり合いである。

ただし対人性愛中心主義には、バトラーのラカン読解にもとづく理論では説明できない部分がある。対人性愛中心主義もまた社会的権力との関連で考えなければならないものだが、しかしその作用は、否認や抑圧のようなあからさまな禁止の機制とは異なるからである。これを説明するうえで重要になるのが、シルヴィオも取り上げていたウニコットの移行対象論である。ウニコットは移行対象が脱・備給されていくプロセスについて、「健康な場合、移行対象は『内側に行く』ことはなく、それについての感情が必ずしも抑圧されるわけではない」として、「抑圧」とは異なる現象を論じている (Winnicott 1971=2015: 7)。

それは忘れられるのではないし、悼まれる (mourned) こともない。それはただ意味を失うのである。なぜなら、移行現象はすでに拡散して、「内なる心的現実」と「ふたりの人に共通して知覚されている外的世界」とのあいだの中間的な領野の全体に広がっているからである。言ってみれば、それは文化的領域の全体である。(Winnicott 1971=2015: 7 傍点引用者)

このように、移行対象は間主観的な文化的領域へと拡散し、「ただ意味を失う」ところで、移行対象はラカンが対象 a のアイデアを得るきっかけとなった概念だが、対象 a は単数的な欠如すなわち現実界を前提とする否定神学的な概念である (東 1998)。これに対してウニコットの理論では、ラカンの現実界は前提されていない。それゆえ移行対象が「ただ意味を失う」という理論は、ラカンの論理とは異なる議論に開かれている。

この理論は、移行対象への愛着や欲望が対人性愛へと回収される仕方を説明した理論として読み替え可能である。というのも、社会で規範的とされるセクシュアリティは移行対象を指向するものではないからである。「二次元」への欲望が対人性愛へと回収されるとき、欲望の対象が人間とは異なる種類の存在物であることが無意味なこととみなされる²¹。これについて、伊藤は大泉実成との対談のなかで以下のように語っている。

簡単な線画であって身体の表象でないにもかかわらず人格のようなものを感じさせて、感情移入をさせてしまう……ということを忘却している、という忘却自体をもう一回忘却するみたいな構造になっている。(大泉 2017: 273)

マンガのキャラクターが描かれたものであることは自明であり、そのこと自体を否定する人はいないだろう。むしろ伊藤の言

21 このことを表しているのが、「既存の解釈図式への回収による抹消」(松浦 2021c: 77) である。

う「忘却」は、正確にはウィニコットの言う「意味を失う」事態として把握すべきだと考えられる。このような事態を、伊藤は「否認が二重になってい」と語っている(大泉 2017: 273)。このような、心的プロセスにおける二重の締め出しは、バトラーの言う〈字義どおり化〉という幻想と相似な構図である。ただし伊藤自身が明言しているように、ここで伊藤は「否認」をフロイト＝ラカンの意味で用いていない。このことは、予めの排除とは異なる機制としての、禁止でも抑圧でもない、「ただ意味を失う」という抹消と対応している。

このように、対人性愛中心主義的な解釈図式のもとで、非対人性愛的な多重見当識は「ただ意味を失う」という仕方で——あからさまな禁止とは異なる仕方で——抹消される。つまり対人性愛中心主義は、誤配可能性を抹消する社会的権力として考える必要がある。そしてこの抹消は〈字義どおり化〉という幻想——つまり性別二元論や異性愛主義——を構成するものであり、その意味でも社会的権力と関連するものなのである。

VI. 対人性愛中心主義批判の射程

対人性愛に還元できない「二次元」へのセクシュアリティは、現に存在する。このような人々の存在を理解できるようにするために、現実社会における規範の再生産を空転させるものとしてのアニメーション的な誤配による攪乱という理論を提示した。非対人性愛的な多重見当識とは、アニメー

ションによって構築された対象をめぐる欲望であり、そして対人性愛文化のなかから歴史的に派生したものでありながら対人性愛を相対化するものなのである。しかし他方で、このようなセクシュアリティの存在は社会で巧妙に不可視化されている。性別二元論と対人性愛中心主義という「〈字義どおり化〉という幻想」のもとで、「二次元」へのセクシュアリティは「ただ意味を失」い、そして対人性愛を問う可能性が予め抹消されるのである。このように、本稿では「二次元」へのセクシュアリティの存在が可能であることと、そのセクシュアリティが社会で周縁化されることをともに説明した。最後に、本稿の意義や示唆と、今後の課題を提示する。

まず、ジェンダー表象をめぐる議論において、性的・恋愛的魅力に紐づいた表象と、そうでない表象とで議論を分ける必要がある。すでに指摘されているように、「異性愛」と「性別分業」は、それぞれ関連する構造が異なるため、同じ仕方では議論できない(山根 2010)。本稿の議論からは、異性愛主義や性的モノ化、および性的・恋愛的魅力と紐づいたステレオタイプの問題を検討するうえで、対人性愛中心主義を無視すべきではない、と言える。

このことは、二次元の性的・恋愛的表现をめぐるフェミニズムの議論と密接に関わる。従来議論では「二次元か三次元か」の区別は「フェミニズムによる表象批判とはあまり関係がない」(小宮 2019: 236)という認識が主流だった。しかしここでは、

対人性愛が予め前提とされてしまっている²²。つまりそのような考え方は、二次元に対する非対人性愛的なセクシュアリティの存在を予め抹消するものであり、それゆえ倫理的に問題含みなものである。

この問題は、とりわけ人工物へのジェンダー帰属の議論やポルノグラフィの議論において明確に表れる。人工物のジェンダー規範的性質は、特定のジェンダーと特定の性質との「結びつきをより確信させることにつながる」点で倫理的に問題となりうる（西條 2019: 209）。ではなぜ人工物であるにもかかわらず、そのような影響を人々に与えることが可能なのか。「それはジェンダーマーカーとして機能する性質は人の場合も人工物の場合も同じだからである」（西條 2019: 209-210）。この指摘は妥当だろう。しかしこの種の議論では、いかなる社会的要因によって特定の「同じ性質」がジェンダーマーカーとして機能できるようになっているのか、という問いを回避してしまっている。

同じことが、ポルノが集団としての女性

を従属的地位に置いたり性的対象化したりするという批判²³にも言える。ポルノは「女性が何のために存在すると言われるか、どのようなものとして見られるか、どのようなものとして扱われるかを確立」したり、「女性に対して何ができるかという観点から、女性とは何であり、何でありうるかを構築」したり、「女性に対してできることという観点から、男性とは何であるかを構築」すると批判されてきた（MacKinnon 1996: 25）。しかしこの種の議論をそのまま「二次元」表現に適用すると、「二次元の女性／男性キャラクター」と「生身の女性／男性」が性的な文脈において同一カテゴリーに属する存在であると認識される、ということが予め前提として自明視されてしまう²⁴。それは誤配可能性の抹消であり、すなわち非対人性愛的な多重見当識の抹消でもある²⁵。

これに対して、対人性愛中心主義への批判は、「性的対象とされるという性質」が「二次元の女性キャラクター」と「生身の女性」で同じくジェンダーマーカーとして

22 たとえば小宮（2019）は、一方で女性を性的対象化する意味連関には言及しながら、他方で対人性愛中心主義的な意味連関の問題は一切考慮しておらず、結果的に非対人性愛的な多重見当識の存在を抹消している。もっとも、これはあくまで一例にすぎず、「性的／恋愛的創作物ばかりが問いの対象にされる一方で、対人性愛が自明視され続けている、という非対称性」（松浦 2021b: 76）は従来のさまざまな議論に広く見られる。この点に関するより具体的な検討は稿を改めて行いたい。

23 フェミニズムにおけるポルノ批判に関する近年の研究については難波（2019）や Mikkola（2019）を参照。

24 同じことは、未成年キャラクターが登場する「二次元」の性的表現を「児童ポルノ」として批判する主張にも当てはまる。このような批判もまた、「二次元の未成年キャラクター」と「生身の未成年」とを性的な文脈で同一カテゴリーに属する存在とみなすことを、予め前提にしてしまっているのである。

25 また守の示唆するように、男性向けポルノコミックを読む女性読者は、「男性向けポルノコミックは男性が描く“疑似女性”であるから、自分とは切り離された別のものとして見ることができるので、ファンタジーとして受け止めやすい」という読みをしている場合がある（守 2010: 192）。このような女性のセクシュアリティもまた、対人性愛中心主義的な解釈図式のもとで抹消されるものである。

機能してしまう状況への批判であり、また「二次元の女性／男性キャラクター」と「生身の女性／男性」が性的な文脈で同一カテゴリーに属する存在とみなされる状況への批判でもある²⁶。対人性愛中心主義（および性別二元論）とは、二次元キャラクターと生身の人間を無前提に同一カテゴリーに分類してしまう認識を可能にするものであり、それゆえ「二次元」の性的表現が引き起こす（とされる）問題を発生可能にしてしまう、まさに当のものではないか？ このような構造的問題は、従来の研究では批判され損ねてきた。本稿の意義は、この点への批判を可能にしたことにある。

同様のことはBLにも言える。たとえばBLに対して、「攻め／受け」の権力関係（および受けへの感情移入）が男女の権力関係を再生産するという非難や、女性キャラクターを排除したジャンルだという非難がなされることがある（金 2019）。こうした非難は、いずれも「〈字義どおり化〉という幻想」を所与の前提としている言説の典型である。つまりこのような非難それ自体が対人性愛中心主義（および性別二元論）を暗黙裡に持ち込んでしまっており、それゆえ非対人性愛的なセクシュアリティの存在を抹消しているのである。この種の非難に対して、「進化形BL」の存在を指摘する反論はあるものの（溝口 2015）、この種の非難それ自体に含まれる差別的問題が十分に認識されているとは言い難い。

裏を返せば、倫理的・規範的判断が対人

性愛を自明視したうえでなされる状況では、対人性愛中心主義批判という倫理は理解不能なものとなさされてしまう。それゆえ、セクシュアリティをめぐる従来の倫理的・規範的価値判断が対人性愛を基準にしたものとなっていたのではないかと問い直す必要がある²⁷。従来の議論に広く見られる問題は、性的表現が一方向的に問いの対象にされているのに対して、対人性愛が自明のものとして不問に付されている、という非対称性である。性的表現が引き起こすとされている問題は、なぜ「対人性愛問題」と呼ばれないのか。こうした倫理的な論点について、本稿では紙幅の都合上網羅的な議論はできていないため、今後さらなる検討が必要である。

他方で、本稿はあくまで理論的な検討であるため、具体的な事例や経験的調査を蓄積していくこともまた今後の課題である。対人性愛中心主義的な社会において、非対人性愛的な多重見当識を言語化するための語彙は決定的に不足している。それゆえ第一に、人々の営みのなかで現に生じている誤配を言語化していくことが必要である。そのために、たとえば非対人性愛的な多重見当識の人々における主観的な意味連関を記述していく研究が考えられる。これと並行して第二に必要なのが、誤配可能性を左右する構造を、マクロな規範だけでなくよりミクロなレベルまで考察することである。そこでは、表現の内容やコードの分析とは別次元の、誤配可能性を促進／抹消す

26 それゆえ対人性愛中心主義への批判は、たとえばフェミニズム運動を「モテない女のひがみだ」とみなすような「からかい」に対する批判でもある。

27 その際には、社会状況や規範の「反映」と「再生産」を注意深く区別することが重要となるだろう。

るコンテキストやインターフェイスあるいはメディアの物質性などの分析が不可欠である。そのような研究を通して、「対人性愛

問題」をジェンダーの観点から論じることが可能となるだろう。

付記

本稿にご助言いただいた、福岡ポップカルチャー研究会、オタフェミ研究会のみなさま、および池山草馬氏に深く感謝申し上げます。また本研究はJSPS科研費(課題番号21J11381)の助成を受けたものである。なお本稿に先立って刊行された松浦(2022a)は、本稿の紹介および補論に相当する。

参考文献

- 東浩紀, 1998, 『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社。
 ———, 2001, 『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』講談社。
 ———, 2007, 『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』講談社。
 ———, 2011, 『サイバースペースはなぜそう呼ばれるか+——東浩紀アーカイブス2』河出書房新社。
 東園子, 2015, 『宝塚・やおい、愛の読み替え——女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社。
 Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
 藤本由香里, 1992, 「少女マンガにおける『少年愛』の意味」水田宗子編『ニュー・フェミニズム・レビュー②女と表現——フェミニズム批評の現在』学陽書房。
 ———, 2007, 「少年愛/やおい・BL ——二〇〇七年現在の視点から」『ユリイカ』39巻第16号: pp.36-47。
 藤高和輝, 2018, 『ジュディス・バトラー——生と哲学を賭けた闘い』以文社。
 Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society*, Polity Press. (門田健一訳, 2015, 『社会の構成』勁草書房.)
 Gupta, Kristina. 2015. "Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 41(1): pp.131–54.
 堀あきこ, 2009, 『欲望のコード——マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店。
 稲葉振一郎, 2006, 『モダンのクールダウン』NTT出版。
 伊藤剛, 2014, 『テヅカ・イズ・デッド』星海社。
 金孝眞, 2019, 「フェミニズムの時代、BLの意味を問い直す——二〇一〇年代韓国のインターネットにおける脱BL言説をめぐって」ジェームズ・ウェルカー編『BLが開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社。
 小宮友根, 2019, 「表象はなぜフェミニズムの問題になるのか」『世界』第920号: pp.228-236。
 MacKinnon, Catharine. 1996. *Only Words*. Cambridge: Harvard University Press.
 松浦優, 2021a, 「二次元の性的表現による「現実性愛」の相対化の可能性——現実の他者へ性的に惹かれない「オタク」「腐女子」の語りを事例として」『新社会学研究』第5号: pp.116-136。
 ———, 2021b, 「アセクシュアル/アロマンティックな多重見当識=複数的指向——仲谷鳩『やがて君になる』における「する」と「見る」の破れ目から」『現代思想』49巻第10号: pp.70-82。

- , 2021c, 「日常生活の自明性によるクレーム申し立ての「予めの排除／抹消」——「性的指向」概念に適合しないセクシュアリティの語られ方に注目して」『現代の社会病理』第36号: pp.67-83.
- , 2022a, 「メタファーとしての美少女——アニメーション的な誤配によるジェンダー・トラブル」『現代思想』50(11).
- , 2022b [近刊], 「雰囲気としての強制的（異）性愛——アセクシュアルを理解可能にするため現象学」稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学（仮）』ナカニシヤ出版.
- Mikkola, Mari. 2019. *Pornography: A Philosophical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Miles, Elizabeth. 2020. "Porn as Practice, Porn as Access: Pornography Consumption and a 'Third Sexual Orientation' in Japan." *Porn Studies* 7(3): pp.269-78.
- 溝口彰子, 2015, 『BL進化論——ボーイズラブが社会を動かす』太田出版.
- 守如子, 2010, 『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』青弓社.
- 難波優輝, 2019, 「ポルノグラフィをただしくわるいと言うためには何を明らかにすべきか」2019年度哲学若手研究者フォーラム報告資料（2022年6月15日取得, https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/293105/ec83452b99a0bd2d1c797d40d5240ae4?frame_id=603867）.
- 大泉実成, 2017, 『オタクとは何か?』草思社.
- 大塚英志, 1994, 『戦後まんがの表現空間——記号的身体の呪縛』法蔵館.
- , 2003, 『キャラクター小説の作り方』講談社.
- Przybylo, Ela. 2011. "Crisis and Safety: The Asexual in Sexusociety." *Sexualities* 14(4): pp.444-61.
- 西條玲奈, 2019, 「人工物がジェンダーをもつとはどのようなことなのか」『立命館大学人文科学研究所紀要』第120号: pp.199-216.
- 斎藤環, 2000, 『戦闘美少女の精神分析』太田出版.
- , 2003, 『博士の奇妙な思春期』日本評論社.
- ササキバラゴウ, 2004, 『<美少女>の現代史——「萌え」とキャラクター』講談社.
- Silvio, Teri. 2010. "Animation: The New Performance?" *Journal of Linguistic Anthropology* 20(2): pp.422-38.
- 田中俊之, 2009, 『男性学の新展開』青弓社.
- Thomasson, Amie L. 1999. *Fiction and Metaphysics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 富沢雅彦, 1985, 「世紀末美少女症候群伝説」富沢雅彦編『美少女症候群』ふゅーじょんぷろだくと.
- Vincent, Keith. 2011. "Translator's Introduction, Making It Real: Fiction, Desire, and the Queerness of the Beautiful Fighting Girl." In *Beautiful fighting girl*, edited by T. Saitō. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Winnicott, D.W., 1971, *Playing and Reality*, Routledge. (橋本雅雄・大矢泰士訳, 2015, 『改訳遊ぶことと現実』岩崎学術出版社.)
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房.
- 吉本たいまつ, 2009, 『おたくの起源』NTT出版.

(掲載決定日: 2022年6月10日)

Abstract

Multiple Orientations as Animating Misdelivery: Theoretical Considerations on Sexuality Attracted to Nijigen (Two-Dimensional) Objects

Yuu MATSUURA

This article aims to explain theoretically that it is possible to be attracted to nijigen (two-dimensional) objects that is not reduced to an attraction to “real” flesh-and-blood people (“interpersonally oriented sexuality”) and how such a sexuality can be made invisible. Interpersonally oriented sexuality has been taken for granted in previous studies. This article considers desire for nijigen as desire for “artifacts created based on the stock of knowledge that has become an artificial environment.” Then, by rereading Hiroki Azuma’s criticism against “negative theology” as criticism against gender binarism and interpersonally oriented sexuality-centrism, this article theorizes about “subversion by animating misdelivery,” which idles the reproduction of rules and norms in the real world. Finally, it is explained that such non-interpersonally oriented sexuality is cunningly erased in a way that is different from suppression or repression, in that “it loses meaning,” through Judith Butler and Donald Winnicott. In so doing, this article suggests the necessity of further research on criticizing interpersonally oriented sexuality-centrism.

Keywords

interpersonally oriented sexuality centrism, gender binarism, literalizing fantasy, pornography, performance/animation

